

「竹島領有」明記の日本地図作成の長久保赤水 中学教科書に登場

2021.5.5

韓国が不法占拠している竹島（島根県隠岐の島町）について、江戸時代の地理学者が描いた日本地図が、今春初めて中学校地理の教科書に掲載された。江戸時代の日本地図といえば伊能忠敬（いのう・ただか）の「大日本沿海輿地（よち）全図」（伊能図）が有名だが、それよりも42年早く完成した。幕府が非公開とした伊能図と異なり、広く民衆に普及したベストセラーで、実測時に参考にした伊能のほか、吉田松陰ら幕末の志士らも愛用したという。（永井大輔）



改正日本輿地路程全図の第二版
（茨城県高萩市提供）

伊能忠敬より42年早く

この地理学者は、享保2（1717）年、現在の茨城県高萩市に生まれた長久保赤水（ながくぼ・せきすい）。農家に生まれ、11歳までに両親を亡くしたが、私塾に通い才能を発揮。52歳で水戸藩の郷士格（武士待遇）となり、61歳の頃には藩主の侍講（教師）を務めた。

安永8（1779）年には、経緯線が入った初の日本地図「改正日本輿地路程全図」（通称・赤水図）を完成させた。日本初の実測地図で知られる伊能図より42年早い。

実測をもとにした伊能図に対し、赤水図は伝聞や地誌などをもとに作られた。約30年にわたり、赤水の功績を伝えてきた長久保赤水顕彰会の佐川春久会長は「探検家からさまざまな地域の地図を買い取ったという話も残っており、赤水の高い情報収集能力が伺える」と語る。



長久保赤水像（茨城県高萩市提供）

幕末の志士も愛用

幕府により秘蔵とされ一般人の目に触れることがなかった伊能図に対し、各地の地名などが書き込まれ、実用性に富んだ赤水図は広く大衆に普及。吉田松陰をはじめ幕末の志士らも愛用した。

「松下村塾や全国の藩校で使われ、明治維新のエネルギーを起爆させた」と佐川会長。伊能忠敬も測量の際に赤水図を携帯していたといい、まさに日本地図の“魁（さきがけ）”といえる。

竹島領有にも一役

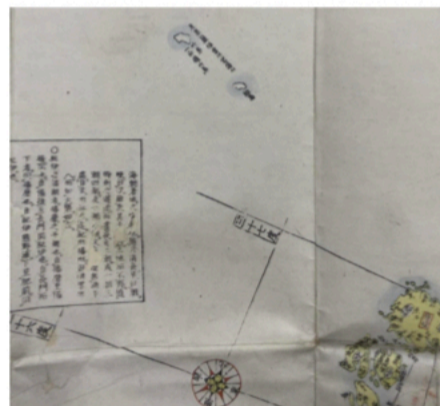
また、赤水図が伊能図と異なるのは、隠岐諸島の北西に「松島」（現在の竹島）と「竹島」=現在の鬱陵（うつりょう）島=が明記されている点だ。

連合国軍総司令部（GHQ）統治下にあった昭和22（1947）年には、外務省が米国に竹島の領有権を主張した文書に赤水図の拡大図を添付した。文書には「竹島には朝鮮名がなく、朝鮮製の地

図にも示されていないことに留意すべき」とも書かれ、49カ国が署名・調印し、竹島が日本の領土と認められた26年のサンフランシスコ平和条約に影響を与えた可能性が高い。

歴史地理学が専門で、江戸時代の地図に詳しい茨城大教育学部の小野寺淳・元教授（65）によると、赤水図は元図の段階から竹島が描かれており、赤水が島の存在を認識していたことは明らかだという。

ただ、小野寺教授は「赤水が日本の領土と認識していたかは明確な資料が見つかっておらず、研究上、領土問題について言及することは難しい」とも指摘。それを踏まえた上で「赤水が地図に記したことから、竹島周辺で当時の日本人が漁などの経済活動を行っていたことは推測できる」と指摘する。



竹島が記載された赤水図。右下が隠岐の島（永井大輔撮影）

着々と高まる評価

現代の日本外交を補完する意味でも重要な資料といえる赤水図だが、小野寺教授によると、これまで学校教育の場で伊能忠敬については学習しても赤水には触れないのが通例だった。

ところが、昨年9月に高萩市歴史民俗資料館に保管されている地図や文書693点の赤水図関係資料が国の重要文化財に指定されるなど赤水の功績が近年、高まりつつある。

今年度からは、帝国書院の教科書「中学校地理」に、日本地図の変遷を示す項目で赤水図が掲載された。経度と緯度を記し、伊能図より約40年早く作られ、一般人には赤水図が浸透していたことなどが紹介された。赤水の教科書掲載は初めてで、小野寺教授は「日本地図を教える上で無視できない資料だと認められた」と手応え語る。



長久保赤水の功績が掲載された教科書のページを開き、喜びを語る佐川春久さん＝茨城県高萩市（永井大輔撮影）

赤水図の教材化を目指してきた佐川会長も「教科書への掲載は大きな前進。日本が誇る世界に通用する偉人をさらに広めていきたい」と話す。高萩市もこの教科書を採用し、中学校地理の授業で郷土の偉人について学んでもらう考えだ。